事例番号 136　響創のまちづくり（佐賀県唐津市）

1. 背景

唐津市は佐賀県北西部、唐津湾に面する人口約 13.5 万人の市である（2005 年 1 月に 8 市町村が合併し新市に移行。2006 年1月に 1 村が編入）。大陸との交易拠点として古くは「唐の津」と呼ばれていた。江戸時代に小倉藩主となった小笠原氏の一族の城下町として栄え、今でも当時の町割がよく残されている。伝統的な「唐津くんち」（唐津神社の秋祭り）は全国的に有名である。

近代では石炭積出港として、また、漁業、水産業、農林業のまちとして経済が発展し、商業も栄えたが、最近ではモータリゼーションの進展に伴う人口の郊外化、郊外幹線道路沿いにおける大型商業施設の立地等により中心市街地の空洞化が顕著になってきている。

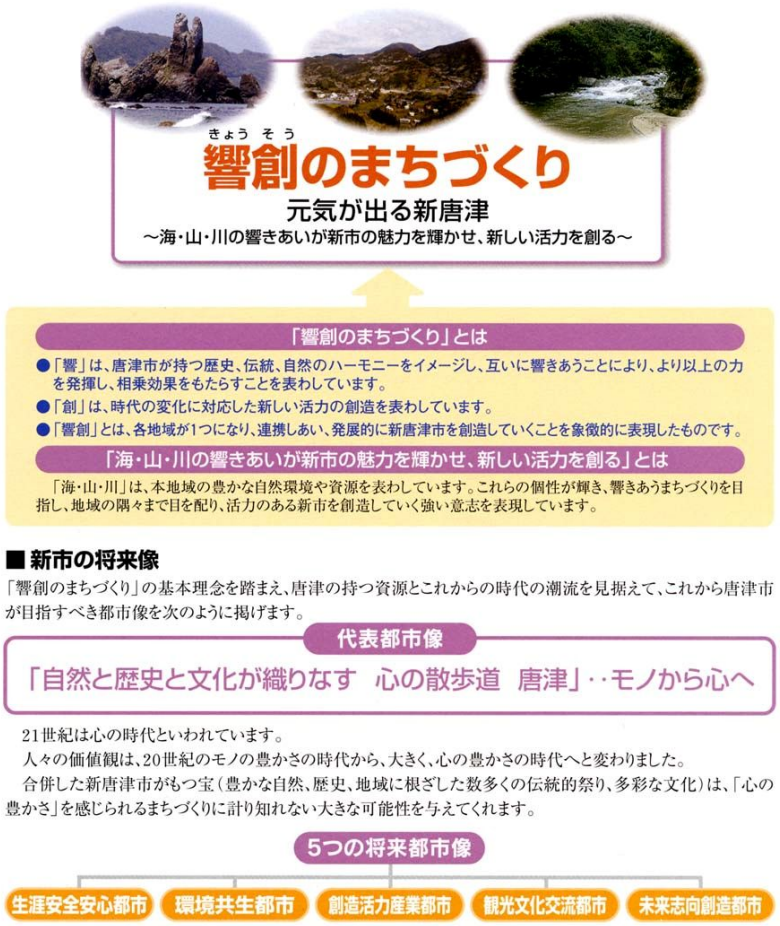
唐津市中心部　（資料：唐津市）

2. 目標

第 1 次唐津市総合計画（2005 年度～2014 年度）では、まちづくりの基本理念を「響創のまちづくり 《元気が出る新唐津》 ～海・山・川の響きあいが新市の魅力を輝かせ、新しい活力を創る～」としている。そして、その理念の下で実現を目指す「代表都市像」を「「自然と歴史と文化が織りなす心の散歩道　唐津」・・モノから心へ」とし、具体的には次の 5 つの将来都市像を設定している。

① 生涯を通じた安全・安心都市（生涯安全安心都市）
② 人と地域と自然が共生する環境都市（環境共生都市）
③ 創造力に富んだ活力ある調和型産業都市（創造活力産業都市）
④ 自然と歴史と文化に包まれた本物が輝く観光文化交流都市（観光文化交流都市）
⑤ 未来を志向する創造都市（未来志向創造都市）

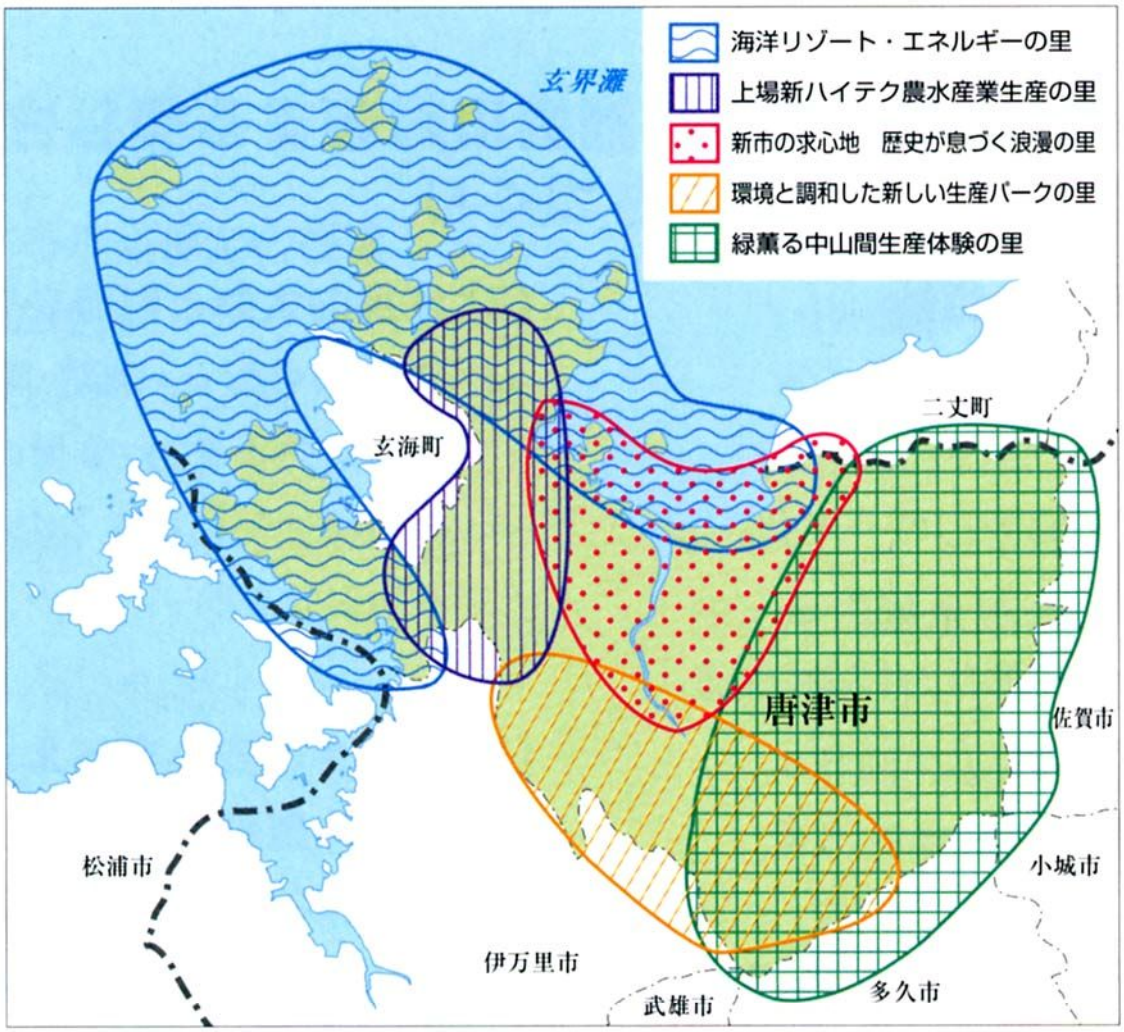
最近では各地のまちづくりで生態系保護の重視を打ち出してきているが（山と海とが水系によりひとつに結ばれている等の視点）、唐津市の総合計画は「海・山・川の響きあい」と 3 つの要素の相互関係を正面に据えている。また、これからのまちづくりはモノづくりではなく人づくり、社会づくりであるという方針が各地のまちで提示されてきているが、唐津市も代表都市像に「モノから心へ」という言葉を織り込んでいる。



唐津市総合計画の基本理念と都市の将来像　（資料：「唐津市総合計画のあらまし」）

また、総合計画では、唐津市を次の 5 つのゾーンに分けて整備方針を示している。

① 「海洋リゾート・エネルギーの里」ゾーン
② 「上場新ハイテク農水産業生産の里」ゾーン
③ 「新市の求心地　歴史が息づく浪漫の里」ゾーン
④ 「環境と調和した新しい生産パークの里」ゾーン
⑤ 「緑薫る中山間生産体験の里」ゾーン



5 つのゾーン（資料:「唐津市総合計画概要版」）

一方、2004 年度に実施した「全国都市再生モデル調査」では、「自然と歴史と文化が織りなす唐津・海遊浪漫都市構想　～　海に遊び、海に交わり、海を食し、海に癒され、未来に思いを馳せるみなとまち唐津　～」を将来像及び基本理念として掲げた。その後組織された「唐津みなとまちづくり懇話会」でも「みなとを核として交流し、賑わう「唐津みなとまち」」を将来都市像に掲げており、それらは唐津市のまちづくり全体の中の海辺における取り組みとなっている。

3. 取り組みの体制

市民と行政との協働によりまちづくりを進めている。具体的な組織としては市民が主体的に設けた「からつ夢バンク」(1998 年設立)がある。また、市民と行政とのパートナーシップを進める上での「市民参加の場」として「唐津元気再生委員会」が設けられた(市長の直属的な委員会、2003 年設立、既に成果をあげ現在は解散)。一方、唐津港の地元地域主体で港を核とするまちづくりを議論することを目的として「唐津みなとまちづくり懇話会」が設立されている(2004 年設立)。

4. 具体策

(1) 街並みの保全

唐津のまちづくりは街並みの保全から始まったと言える。1989 年に「唐津城址保存整備計画」が策定され、それに基づき辰巳櫓や埋門等の歴史的建造物の保全とともに石垣の道、歩行者橋、サイクリング・ロードの整備が行われ、ネットワークで結ばれた歴史的・文化的・人間的空間が保全・形成された。

唐津城 (資料:唐津市)

1993 年には「地域住宅計画(HOPE 計画)」が策定され、歴史的街並み保全が進められることとなった。HOPE 計画を受け、地元建築士等で組織した任意団体「HOPE 研究会」(1992 年設立)が 1993 年に「曳山の通るまちなみづくり ― 曳山通りの街並み協調ガイドライン」を作成したが、その中で、「唐津くんち」の曳山が通るための道路幅員 9mの確保とそれを見物するための住宅 2 階縁側の保全等を内容とする「街並み協調ガイドライン」が示された。

さらに、最近では町家を除却してマンションに建て替える動きも出てきていることから、街並み保全のために建築物の高さを制限する方策を検討しており、城内地区の約 26ha については 2005 年 3 月に 12mと 15mの高度地区を決定している。

唐津くんち （資料:唐津市）

(2) 市民組織によるまちづくり活動

東京駅を設計したことで有名な建築家の辰野金吾は唐津の出身であるが、唐津には辰野監修、辰野の弟子の田中実設計の旧唐津銀行本店の建物があり、その保存が課題になっていた。市は当該建物を 2002 年度に市指定重要文化財とし、2007 年度までの 5 年間暫定的に市民活動の場として活用することとした。そして、そこで「からつ夢バンク」等の市民組織が活動している。

①「からつ夢バンク」

まちづくりを目的とした市民団体のひとつに 1998 年に設立された「からつ夢バンク」がある。旧唐津銀行本店の再生を図るために唐津青年会議所の有志が設立した組織であるが、その活動範囲はまちづくり全般に及んでおり、「唐津の良さを再発見し、人と人との触れ合いを大切にするまちづくり」を目的としている。会のキャッチフレーズは「夢を預けませんか・・・利息はゆかいな仲間たち夢を貸します・・・返済は少しばかりの汗で」である。

同会のこれまでの活動内容は、他団体へのボランティア参加・協力、「地域マップ」や「福祉マップ」などの作成、ワークショップで引き出した意見を基にしたベンチ製作、大人が 3 人も入る大きなモモや高さ 3.4 メートルの松ぼっくりゴジラの製作（イベント用）、自主制作ケーブルTV番組「ゆめDON どん！」での取材活動等である。また、旧唐津銀行を使ったイベント「夢復興唐津銀行」の企画制作を官民協働で行い、3 年間開催した（近代唐津の懐古展、レトロファッションショー、一人芝居、人形劇、大型絵巻物等）。

アート作品の展示 （資料:からつ夢バンク）

イベントのポスター　（資料：からつ夢バンク）

②「唐津元気再生委員会」

市と市民との協働によりまちづくりを進めていく場として、2003 年に「唐津元気再生委員会」が設立された。この委員会は、「行政の独断だけで各種施策を実施することが民意に沿うのか」という市長の素朴な疑問から生まれた。つまり、委員会は、市民と行政との間に存在するニーズのズレを解消し、市民と行政の目線を合わせたパートナーシップの創出によって、市の産業や経済を活性化することを目的とする協働の場として設立されたわけである。市（元気再生委員会事務局）の資料から要点を引用すると、委員会の意義は次のように説明されている。

1） これからのまちづくりにおいては市民と行政とのパートナーシップ（「市民協働」）が必要であり、委員会はそれを進めるための市民参加の場」である。また、「市民協働」「市民参加」の鍵は「情報公開」と「説明責任」にある。
2） 委員会は市長の「直属的な委員会」であり、「何が可能か」ではなく「何が必要か」「何が求められているのか」を考えるものである。
3） 「市民参加」とは、J. F. ケネディの言葉を借りれば「唐津市が市民に何をしてやるかではなく、市民が唐津のために何ができるか」を考え実行するものである。
4） 委員会は提言だけではなく提言を実行する主体（例えば NPO や地域づくり団体など）を見つけ出し事業を実現する役割までを担う。
5） 委員会はコアメンバーとして地元で活躍する若手の経営者、学識経験者、まちづくりの専門家などから 10 人を市長が直接指名し、ワーキングテーマの選定やスケジュール管理などを行う。

コアメンバーは 3 グループ程度に分かれ、市民からの公募や推薦により委嘱したワーキングメンバーとともにテーマ別の検討を行った（委員会は平日夜間または土曜日に公開で開催、委員は無報酬）。選ばれたテーマは以下の 3 つである。

・ （唐津市立）近代図書館の利便性向上
・ 中心市街地の活性化～空き店舗や旧唐津銀行（国登録有形文化財）などの利用について～
・ まちかど福祉のまちづくり～子育て支援～

唐津元気再生委員会は、2003 年度に実施された全国都市再生モデル調査における中心的組織となった。同調査（「唐津・海遊浪漫都市構想調査」）は、「「海際のまちづくり」のあり方や全体像などの基本的な方針や実現に向けた基本的な戦略などを検討して取りまとめる」ことを目的に実施された。そして、その構想の検討を通じて、①テーマや課題の解決の糸口を見つけることができた、②まちづくりの主役である市民の意識が広がり、先導的取組みが次々と誕生した、という成果が得られた。

「唐津・海遊浪漫都市構想調査」の要点はおおむね以下の通りである。

〔将来像と基本理念〕「自然と歴史と文化が織りなす唐津・海遊浪漫都市構想　～　海に遊び、海に交わり、海を食し、海に癒され、未来に思いを馳せる　みなとまち唐津　～」

〔まちづくりの基本方針〕

① 海の魅力を享受（遊・食・憩）できるまちづくり
② “癒し”と“賑わい”のあるまちづくり
③ 海を身近に感じられるまちづくり
④ 市民が誇れ来訪者が羨望するまちづくり
⑤ 歴史と文化が育む“浪漫チック”なまちづくり

〔実現に向けた基本戦略〕

戦略 1 ゾーニングとその方向性に沿った利活用計画
戦略 2 海遊ルートや海辺とまちなかをつなぐ動線を計画・整備する
戦略 3 みなとらしい風景をつくる
戦略 4 賑わいと交流をつくる
戦略 5 歴史・文化を演出し活用する
戦略 6 海の高い付加価値（ポテンシャル）を発掘し、活用を図る
戦略 7 海を演出する仕掛けをつくる

以下に唐津市の報告書からいくつかの頁を抜粋して掲載する。

1. 調査対象地域

4. 取り組みの経緯

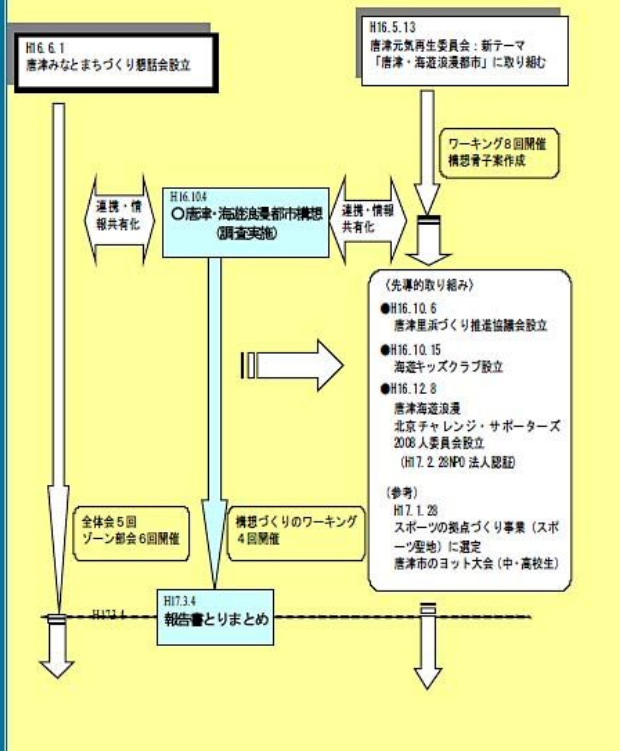
○民間の発想で「海の街・唐津」の海辺の賑わいを取り戻そうと「唐津元気再生委員会」が取り組んだテーマが「唐津・海遊浪漫都市」であり、本構想づくりのスタートである。

○8回開催したワーキングでは、唐津みなとまちの将来像や新たな港湾計画への素案の反映を視野に同時期に設立された「唐津みなとまちづくり懇話会」と互いに連携しながら骨子案を作成し本調査に引き継いだ。

○本調査のワーキングでは、委員の肩書きを外し対等の立場での意見交換を図った。参加はフリーとし、徐々に拡大したワーキングは、最終的には「唐津元気再生委員会」の委員を中心に海への思いが深い市民、行政職員など26人が参加し、人材の発掘にも繋がった。

○一方で、船上及び陸上からの現地視察などを実施し数多くの専門的委員からなる「唐津みなとまちづくり懇話会」とは、引き続き密接な連携と情報の共有化を図り、官民協働による構想づくりを進めた。

○また、構想の実現に向け、官民の役割分担や直ぐに取り組めるもの、未利用地の暫定活用などについても検討を加える中で、まちづくりの主役である"市民が主体となった先導的取り組み"が次々と誕生し、本構想の実現に向け大きく動き出した。



●実現に向けた基本戦略

戦略1　ゾーニングとその方向性に沿った利活用計画

戦略2　海遊ルートや海辺とまちなかをつなぐ動線を計画・整備する

戦略3　みなとらしい風景をつくる

戦略4　賑わいと交流をつくる

戦略5　歴史・文化を演出し活用する

戦略6　海の高い付加価値（ポテンシャル）を発掘し、活用を図る

戦略7　海を演出する仕掛けをつくる

●早期実現に向けた今後の取り組み

① 海への案内板整備検討
② シンボルルート選定・整備検討
③ 九電火力敷地の暫定利活用検討
④ 海遊ルートの暫定利用検討
⑤ 松浦川河口部の水辺の開放検討
⑥ 海を演出する仕掛けづくり
⑦ きれいな海、ゴミのない海辺への取り組み
⑧ 既存組織との連携
⑨ エコミュージアムマップの作成

（ヨットハーバー）

（ラブアースクリーンアップ 東の浜）

（虹ノ松原）

(3) 「みなとまちづくり」の推進（唐津みなとまちづくり懇話会）

唐津を「海の街」の視点で再生することを目的として、2004 年 6 月に港湾関係者、地元組織代表、行政等をメンバーとする「唐津みなとまちづくり懇話会」が設置された。その背景には港湾計画が改訂期であったことを好機と捉えたということがある。懇話会のコア委員は、学識経験者、商工会議所会頭、唐津港振興会会長、唐津港水産振興協会会長、唐津観光協会専門委員、唐津元気再生委員会委員長、唐津市漁業協同組合代表理事組合長、NPO 法人九州キラキラみなとネットワーク理事長、佐賀県ヨットハーバー指導員、唐津港利用促進協議会会員及び行政（国、佐賀県、唐津市）となっており、地元有力組織の長が多く入っている。

懇話会は、「唐津みなとまち」、「唐津みなとまちづくり」の基本的な方向性について 2005 年 8 月に「地域素案」を策定した。現在、地域素案の実現に向けた具体的な議論を交わすための第 2 ステージに入っている。その早期実現に向けた取り組みとして、「唐津里浜づくり推進協議会」が 2005 年 12 月に「海の街」を演出する汽笛を設置し、定時吹鳴を実施している。

唐津は、古来より海から大いなる恩恵を受けて発展してきた「海のまち」である。「まち」と「みなと」が一体となった風光明媚な風景が唐津の魅力を創り出している。しかしながら、その中心をなす唐津港は現在多くの課題を抱えている。それは、水揚げ量の減少や鮮魚市場施設の老朽化により水産基地としての機能が低下していること、港湾施設の老朽化等により東港への大型客船の入港ができないこと、野積場の未舗装など新たな取扱貨物に対する対応が遅れていることなどである。

このような中、1988 年に策定された現在の港湾計画の目標年次（2000 年）が既に到来していることから、県では新しい港湾計画づくりに着手した。港湾計画の改訂期を好機と捉え、地域の考えを港湾計画に反映させるために地元地域主体の懇話会を立ち上げた。懇話会では、みなとまちづくりのあるべき姿や唐津港の将来像について検討し、2005 年 8 月に「地域素案」を策定した。

① 地域素案の性格

地域素案は、唐津港をどのように活用し地域の振興を図るかを地元地域が主体的に考えたものであり、唐津港だけでなく背後地域との一体的なまちづくりとして基本的な方向性をまとめている。これは、地元地域がこれからの唐津港及び「唐津みなとまち」の将来像として共有し、その具体化に向けて取り組む基本方針となるものであり、港湾管理者に提出して港湾計画の改訂に反映させることを要請するものである。

② 地域素案策定の視点

ⅰ） 地域主体・市民との協働の視点

真に港湾を利用する地元地域が主体となって、市民とともに考える視点で策定されている。

ⅱ） 地域経済活性化の視点

唐津港は、港勢の低下が認められることから、合併後の新市の地域経済を牽引し、港から地域の活性化を推進する視点で策定されている。

ⅲ） 既存資源利活用の視点

唐津は、「まち」と「みなと」が一体となって唐津の魅力を創り出しており、景観資源や歴史的・文化的資源など豊富な既存資源を有していることから、これらを有効に利活用するとともに、新たな資源を掘り起こす視点で策定されている。

ⅳ） まちづくりの視点

唐津港は、背後地域に住家が連たんしているものの、市民生活からかけ離れた存在となっていることから、港を核とした背後地域との一体的なまちづくりの視点で策定されている。

ⅴ） 観光振興の視点

市民や観光客等の交流で賑わい地域の観光振興を促す視点で策定されている。

③「唐津みなとまち」及び唐津港の将来像

唐津の名は、唐・韓（大陸や朝鮮半島）に渡る津（港）に由来すると言われている。唐津は古来より人と物の交流によって栄えてきたまちであり、「唐の津」（唐津港）を中心として発展してきた「みなとまち」である。

唐津港や「唐津みなとまち」は、石炭の積出港として繁栄を極めた明治・大正期から時代の変遷とともに背後のまちと一体となって発展し、現在はコンパクトな多機能港湾となった。しかしながら、港湾機能の老朽化が進み、「みなと」と「まち」の一体感が薄れるなど、「みなとまち」の核としての位置も低下している。

このため、懇話会では、市民や来訪者など多くの人々が交流し、地域経済の発展を先導する、賑わう「唐の津」の再生を目指すこととした。それは、大陸との交流による歴史的な結びつきや、白砂青松の海岸線や唐津城に代表される美しく象徴的な景観、あるいは海辺や「みなと」と市街地との近接性など、「唐津みなとまち」や唐津港が持つポテンシャルを最大限に活かそうとするものである。その将来像のイメージは、「みなとを核として交流し、賑わう「唐津みなとまち」」である。

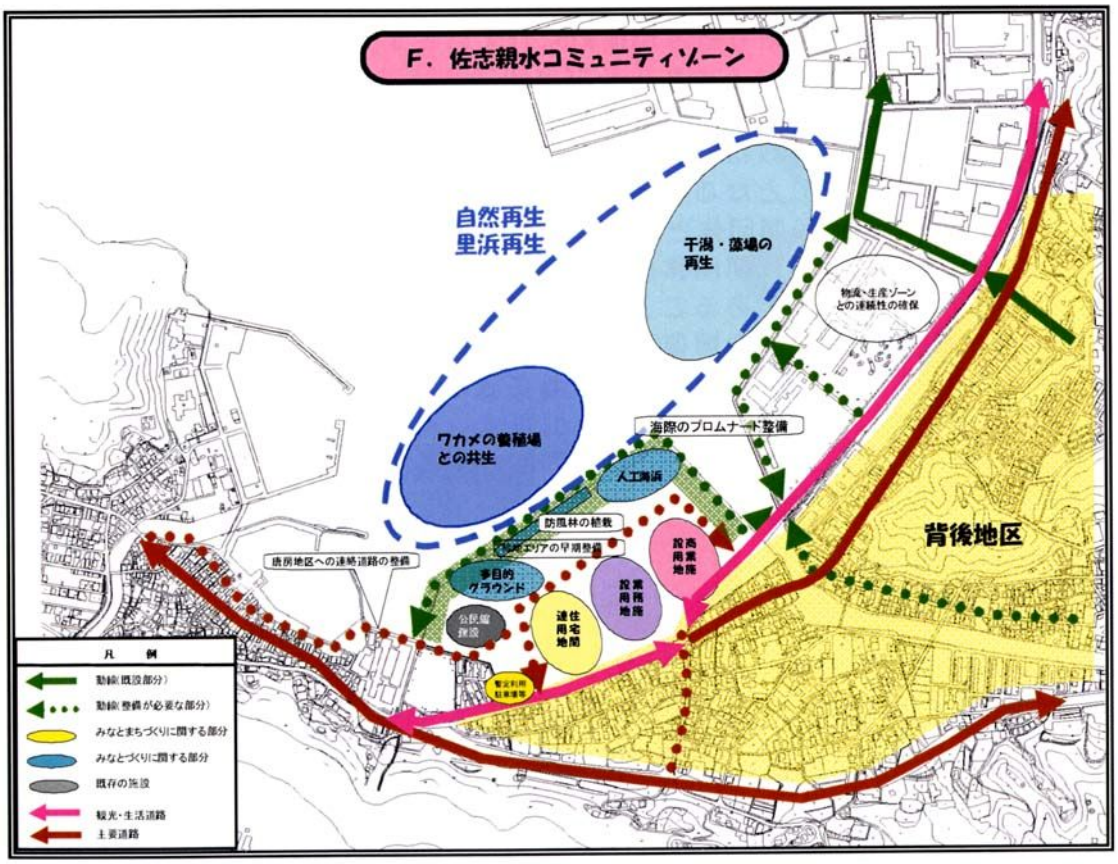
④ 8 つの基本方針

懇話会では、唐津港の将来像を実現するための 8 つの基本方針を設定している。

1） 恵まれた自然・景観の保全・再生と利活用
2） 地域の経済基盤としての基幹的港湾機能の維持充実
3） 「海の玄関口」としての機能充実
4） 水産等の生産機能の再生・高度化と他分野との連携
5） 人々が身近に感じられる海辺の空間形成
6） 世界に名を知られる海洋スポーツのメッカづくり
7） 「まち」と海・「みなと」が一体となるプロムナードの確保
8） 大規模災害に備えた地域の安全・安心の確保

5. 特徴的手法

自然、歴史、文化の各面の環境を統合的にまちづくりに結び付けようとする大きな目標を掲げ、その実現を市民と市との協働体制で図っていることが大きな特徴である。



地域素案が設定した 6 つのゾーンのうちのひとつ「佐志親水コミュニティゾーン」（資料：懇話会）

6. 課題

都市再生モデル調査の結果において、「構想の更なる具体化、活動の継続性、人材育成、法的規制、利害調整、財源確保、関係機関との調整、官民の連携、構想に対する認識の共有化など」が新たな課題であるとされた。

（参考・引用文献）
唐津市ホームページ
からつ夢バンクホームページ
日本建築学会編『まちづくりの方法』丸善、2004 年